

サント・ステファノ騎士団とレパント海戦

松 本 典 昭

はじめに

1571年10月7日、日曜日。ギリシアのレパント（ギリシア名ナフパクトス、トルコ名イネバフト）の沖合いで、キリスト教諸国の神聖同盟艦隊とオスマン艦隊が地中海の覇権をかけて激突した。前者はガレー船208隻、ガレアス船6隻、ガレオン船26隻で構成され、戦闘員は約84,000人。後者はガレー船242隻に戦闘員は約88,000人。両軍あわせるとじつに482隻の軍船に約172,000人の戦闘員である。この空前の大軍が入り乱れての大海戦は正午から夕暮れまでの約5時間におよび、神聖同盟軍が圧倒的な勝利をおさめて終わった。これが地中海の歴史を塗り替えたといわれる史上名高いレパントの海戦である¹⁾。

ところでこのレパント海戦にサント・ステファノ騎士団が参戦していたことは、ほとんど知られていない。サント・ステファノ騎士団は、メディチ家の第2代フィレンツェ公コジモ一世が1562年に創設したばかりのトスカーナ海軍である²⁾。誕生から10年にも満たない短期間での快挙であった。

本稿では騎士団の最初の10年間の歩みをたどることにより、いかなるかたちでレパント海戦に参戦したのか、なぜ参戦したことが歴史のなかで忘却されるようなかたちで参戦したのか、その経緯と理由を考察してみたい。

I ほろ苦いデビュー

1562年にサント・ステファノ騎士団が誕生し

たとき、オスマン帝国は大帝スレイマン一世（位、1520～66年）の治世で最盛期を迎えていた。すでに帝国陸軍は1526年にモハーチの戦いに勝利してハンガリーを征服し、帝国海軍は1522年に聖ヨハネ騎士団をロードス島から放逐したのに続いて、1538年にはプレヴェザ海戦に勝利していた。プレヴェザ海戦は、1533年に帝国に帰順したバルバリア海賊バルバロッサ・ハイレッティン（1483?–1546）が「大提督」の肩書きでオスマン艦隊を指揮して、アンドレア・ドーリア率いるキリスト教同盟艦隊を撃退した戦いであった³⁾。

こうしてオスマン帝国はバルカン、東欧からシリア、エジプトを経て、北アフリカにいたる大帝國を築き上げた。わずかにキプロス島とクレタ島がヴェネツィア領にとどまったことを除けば、地中海のほぼ全域がオスマン帝国の支配下に置かれたことになる。

ロードス島を追われた聖ヨハネ騎士団は、1530年に本拠地を西のマルタ島に移してマルタ騎士団と呼ばれるようになった。そのマルタ騎士団とジェノヴァ艦隊、ヴェネツィア艦隊、教皇庁艦隊などは、地中海防衛のために巡視を怠らなかったが、そうした防衛的かつ攻撃的な巡航の網の目をかいくぐって、北アフリカから出撃するオスマン艦隊とバルバリア海賊は難なくイタリアの沿岸を荒し回ることに成功していたのであった。

コジモ一世の支配するフィレンツェ公国は、内陸国家と思われがちであるが、ピサとリヴォルノを擁する海洋国家でもあった。貿易ルートを確保するためにも、イタリアの海域からイス

ラム船を追い払う必要があった。また、イスラムのガレー船に漕手として拘束されていたキリスト教徒奴隷を解放するという崇高な宗教的動機も重なっていた。コジモー世がトスカーナ海軍の創設と増強に並々ならぬ関心を寄せた理由である。

しかし騎士団の創立から海軍を組織するまで、そして海軍を組織してから実戦を経験するまで、ある一定の時間を経る必要があったのは当然である。確かに1562年以前にも「国家の艦隊」は存在していたが、とるにたらない存在であった。騎士団創立をまって初めて「海軍」と呼べるものができあがったのである。

騎士団創立当時の所有船舶はわずか数隻であったため、ピサの造船所ではフル稼働で集中的な造船が進められたが、船舶だけで海軍ができるものではない。1562年当時の騎士団員は約60名である⁴⁾。その他の下級の船員は急造がきかないのも事実であった。艦隊が組織されて確実に船出する前には、長期間の十分な実戦訓練によって一糸乱れぬチーム・ワークを作り上げる必要があった。その日に備えて、海事の専門家が海軍の技術的戦術的な組織化をはかり、堅忍不拔の精神を鍛え上げていかねばならない。

しかしいわゆる「戦火の洗礼」は、早くも騎士団創立の翌年のことであった。初代フィレンツェ公アレクサンドロの庶子の初代提督ジュリオ・デイ・メディチ時代のことである。この「君主提督」のかたわらには、老獪な「海の狐」ピエロ・マキアヴェッリが副官として仕えていたが、それにも関わらず時期尚早の観は否めなかった。

1563年4月、バルバロッサ・ハイレッディンのかつての腹心で現在はトリポリ総督となっていたドラグトが、北アフリカにあるスペイン人要塞オランを包囲した⁵⁾。オランの救援に赴くスペイン艦隊を側面から支援するために、艦隊派遣の要請を受けたコジモー世は、メディチ家所有の2隻のガレー船とサント・ステファノ騎士団所有の2隻のガレー船「ルーパ号」と「フィオレンツァ・ヌオーヴァ号」の計4隻を派遣

することにした。この出征が騎士団の最初の公的な軍事行動となる。

さて1563年7月29日木曜日のこと。提督ジュリオ・デイ・メディチ率いるトスカーナ艦隊はバルセロナを遠望しながらカタルーニャの海岸に沿って航行していたが、海上で「ルーパ号」のメインマスト（主樁）と帆桁が壊れたために後方に取り残された。そして騎士団の旗艦「フィオレンツァ・ヌオーヴァ号」からもスペインのガレー船団からも遠く隔たったとき、突如2隻の海賊船のガレオッタ船が姿を現し、背後に付け、疾風のごとく「ルーパ号」に襲いかかった。思いがけない奇襲攻撃に、「ルーパ号」の不馴れな乗組員は慌てて船を放棄し、次々に海中に飛び込んだ。彼らは泳いで陸地にたどり着いたが、騎士たちは船上の持ち場にとどまって勇戦した。この戦闘で艦長の騎士フランチェスコ・ルスティチほか、騎士のベルナルド・デイ・ロレンツォ・リドルフィ、ジュリアーノ・デイ・ピエロ・ジャンフィリアッツィ、ピエロ・デイ・ミケーレ・ブルーニ、アッツォーネ・デイ・オベルティーニら多数の騎士が命を落とした。生存者は捕らえられ、船は奪われた⁶⁾。これが騎士団の最初の戦闘、そして最初の敗北であった。

この敗戦に関連して、もう一人の男が命を絶ったことが古文書に見える。ポテンツィアーノ出身の侯爵シピオーネ・マラスピーナである。彼は初め「ルーパ号」を指揮していたが、船体の支障のためにみずからは「フィオレンツァ・ヌオーヴァ号」に乗り移り、「ルーパ号」の指揮権を騎士フランチェスコ・ルスティチに託して、修理のためにリヴォルノ港への帰還を命じたのだった。「ルーパ号」が船団から離れたときに海賊船に襲撃されたのは上述の通りだが、それと知らない侯爵マラスピーナは錨地カルタジェーナで「新しい土地を見ようと思って」下船した。しかし彼の船が失われた知らせを受けるや、当然責任はおのれにあると痛感し、「悲嘆にくれ、6日後に・・・生きることを止めた」⁷⁾。

提督ジュリオ・デイ・メディチはすぐに雪辱

を誓った。今度は厳しい訓練で団結した騎士団員全員を乗せ、艦装の十分に施された5隻のガレー船団を提督みずからが率いてリヴォルノを出港した。その直後、海岸沿いを遊弋していた3隻のバルバリア軍船に出くわした。バルバリアの軍船は沿岸の近くでも邪魔されずに航行することに慣れきっていたので、トスカーナ艦隊の突然の出現に対して完全に無警戒かつ無防備であった。騎士団の船団は一気に敵艦を取り囲み、大砲を斉射した。すると敵艦の1隻に大穴が開いて傾いたかと思うと、乗組員もろともに転覆した。が、残る2隻は「カピターナ号」と「パドローナ号」の激しい砲撃によく耐えた。そこで騎士たちは今度は敵艦の舷側におどろきみ白兵戦に移ったが、敵も必死に応戦したため、双方に大量の流血をみた。しかしついに騎士団の執拗な猛攻が敵の抵抗を凌駕し、敵艦を2隻とも分捕ってリヴォルノ港に戻った⁸⁾。

この小さな海戦でさえ敵艦にいたキリスト教徒奴隷を多数解放し、逆にイスラム教徒を100人以上も奴隷にした。このように海戦は漕手奴隷の争奪戦でもあった。イスラム教徒の側から見れば、「自分たちの海」でキリスト教徒の「海賊」に突然襲撃されたような不愉快さであったろう。

ともあれ、それからの2年間というもの、提督ジュリオ・デイ・メディチは名声と成功のうち近海を支配した。トスカーナにサント・ステファノ騎士団ありと、オスマン艦隊とバルバリア海賊にしっかりと思い知らせたのである。

II レパントまで

キリスト教諸国の海軍もこの「新しい事態」と「新しい人々」の登場に瞠目し、自分たちの利益に合致した政治的・海事的利用法を模索し始めた。以前はメディチ宮廷に高圧的な態度をとっていたスペイン宮廷も、一転して腰が低くなったほどである。

さっそく1564年、スペインは北アフリカにあるバルバリア海賊の巢窟を攻撃しようとして、

サント・ステファノ騎士団のガレー船と騎士の参戦を公式に要請した。騎士団が要塞攻撃に参加して戦利品と名誉を分かち合ったことはいうまでもないが、ここでは小海戦をいちいち紹介する暇はない。大海戦に触れるにとどめよう。

1565年5月のこと、スレイマン一世の命令でピアリ・パシヤ率いるオスマン艦隊の軍船180隻と兵士30,000余の大軍が、マルタ騎士団の本拠地マルタ島を攻撃するという事態が発生した。700名ほどしかないマルタ騎士団を支援するためにキリスト教連合軍が組織され、コジモ一世もガレー船12隻を派遣して援軍の増強に一役買うことになった⁹⁾。ところがブローデルは『地中海』で、レーン・プールは『バルバリア海賊盛衰記』でこの有名な「大包囲戦」を詳述しながらも¹⁰⁾、サント・ステファノ騎士団の名前には一言も触れていない。しかし、ステファノ騎士の果敢な戦闘精神と崇高な犠牲精神については、最前線に立ち続けた勇敢なマルタ騎士団長ジャン・パリソ・ド・ラ・ヴァレット自身が、みずからの目撃証言を残している。事実、多くのステファノ騎士がマルタの騎士とともに、名誉と引き替えに殉死したのだ。最大の激戦地サン・テルモ要塞の攻防戦では、両軍から一万近い死者が出たが(ドラグトも壮烈な死を遂げたひとりである)、戦死したステファノ騎士のなかには、3人のフィレンツェ人すなわちニココロ・デル・ベーネ、フランチェスコ・ダ・ソンマイア、アズドルバーレ・メディチも含まれていた¹¹⁾。サンテッリは「年代記」のなかで、「[マルタ騎士] 団長ヴァレットによって感謝されつつ帰還が許されたわれらのトスカーナ艦隊は、名誉を満載しつつも幾数名の騎士と兵士を欠いたままりヴォルノに帰港した」と述べている¹²⁾。

また『メディチ家統治下のトスカーナ大公国史』という5巻本の浩瀚な大著を著した歴史家ガルツツイは、次のように結んでいる。「スペイン国王〔フェリペ二世〕と結んだ〔騎士団の〕10隻のガレー船の他に、さらに〔騎士団の〕2隻がドン・ガルシア・デイ・トレド〔スペイン

海軍総司令官]の艦隊に合流した。サント・ステファノ騎士団の総司令官(Gran Contestabile)キアッピーノ・ヴィテッリと多くの騎士たちが、義勇軍として参戦した。公爵[コジモー世]は、スペイン軍よりもはるかに強大なトルコの全軍と干戈を交えることなく、いかに援軍をマルタ島に導き入れるかという方法についての相談役であった。ドン・ガルシアの援軍は島の救いであった。かくも強大な包囲軍に対する徹底抗戦は、歴史が誇りうる最大級の武勲のひとつである。』¹³⁾

サント・ステファノ騎士団は6カ月におよぶ死闘の勝利に貢献した。創立からわずか3年で海軍組織は完成の域に達したのである。

初代提督ジュリオ・デイ・メディチのあとを継いだ第2代提督は、ナポリの貴族チェーザレ・カヴァニリアである。彼はシエナ戦争の際に皇帝カール五世の命令でフィレンツェに来て以来、コジモー世に軍事的に仕え、サント・ステファノ騎士団の創立とともに騎士となった。ガレー船の艦長から提督に昇進し、最後には団長代理(Luogotenente)という騎士団の最高幹部にまで昇りつめることになるエリート軍人である¹⁴⁾。この第2代提督チェーザレ・カヴァニリアの時代に、ステファノ海軍は最も困難な任務を遂行し、その戦闘能力の高さを世に知らしめることになる。

1566年から1571年にいたる時期ほど、西地中海がイスラムの軍船に断続的に脅かされ続けた時期はかつてなかった。アドリア海ではトルコの艦隊がアブルッツォ地方の沿岸に上陸して村々を荒し回り、ティレニア海では海賊カラッチャリがほしいままに恐怖と悲嘆の種をまき散らしていた。スペイン海軍もサント・ステファノ騎士団も不眠不休の警戒にあたったが、各個撃破を試みるには事態はあまりに深刻であったため、スペイン海軍はいまいちどステファノ海軍との連携の必要性を痛感した。提督カヴァニリアは、メッシーナに停泊中のスペイン艦隊と合流するためにガレー船団を派遣することにした。

トスカーナとスペインの両艦隊が船団を組んで航行していると、遭遇したオスマン艦隊は、白地に8つの尖角をもつ変形赤十字の敵旗を見るや一目散に逃げ出した。いまでは騎士団は敵を震え上がらせる存在にまでなっていたのである。

海賊カラッチャリは5隻のガレー船団を率いてトスカーナ商船の襲撃をもくろみ、恐る恐るではあったが、ティレニア海の奥深くまで侵入してきた。騎士団はコルシカ島とサルデーニャ島のあいだでそれを待ち伏せしようとしたが、カラッチャリは勘づいて引き返した。そこでピオンビーノ領主で騎士のヤコポ・ダッピアーノ艦長は4隻の船団を率いて追走し、ポニファチオ海峡で海賊船に追いつくと、すぐに戦端を開いた。艦長ヤコポ・ダッピアーノ自身が火縄銃の一撃をうけて腿に重傷を負うほどの激戦となったが、7時間におよぶ戦闘の後に敵船のうちの3隻はほうほうのていで逃走し、2隻は騎士団の手に落ちた。この軍事行動によって、敵方の310名を奴隷とし、220名のキリスト教徒奴隷を解放した。リヴォルノへの凱旋帰港であった。1569年10月11日のことである¹⁵⁾。

このような騎士団の単独行動は1571年まで続き、多くの敵船を拿捕し、多くのキリスト教徒を解放するという数々の戦績に彩られた。

Ⅲ レパント海戦

スレイマン一世の跡を継いだ息子のセリム二世(位、1566~74年)が1570年、オスマン帝国の大艦隊を結集してヴェネツィア領キプロス島を攻撃した。地中海商業の要衝を失うことを恐れたヴェネツィア共和国は、教皇ピウス五世(位、1566~72年)とスペイン王フェリペ二世に「反トルコ神聖同盟」の結成を訴えるが、キリスト教諸国の足並みは乱れに乱れた末に、ようやく「神聖同盟」の締結にこぎつけたのは、1571年5月20日のことであった。同盟軍総司令官は、皇帝カール五世の庶子でフェリペ二世の異母弟にあたる20代半ばのオーストリア公ド

ン・ファンと決まった。

ドン・ファンが座乗する「王旗掲揚艦」は、バルセロナの造船所で建造されたものであるが、衝角を除く全長が54メートル、船幅は6.2メートル、張り出し甲板を含めた全幅は8.4メートル。大砲は船首砲が5門、旋回砲は18門。2本マストには大三角帆、そして4人漕ぎの櫂を60挺備える、威風堂々たる巨艦である¹⁶⁾。教皇が贈った「十字架上のキリスト」の旗がマストに高く掲げられるとき、それが戦闘開始の合図となる。

スペイン、ヴェネツィア、教皇庁、ジェノヴァ、マルタなどの艦隊からなる軍船の構成は、ガレー船208隻、ガレアス船6隻、ガレオン船26隻。さらにこれにフリゲート船などの小型の補助艦76隻が加わる。総艦数はじつに316隻。これに船員13,000人、漕手43,000人、兵士28,000人の総計約84,000人が分乗する。この大艦隊は9月3日にシチリア島のメッシーナに結集し、9月8日に閲艦式、9月16日にメッシーナを出港。9月23日にイタリア半島の踵のサンタ・マリア・ディ・レウカ岬を通過し、9月26日にコルフ島に入港。そこでオスマン艦隊がレバントに停泊中という情報を得て、10月3日にコルフ島を出港し、10月7日にレバント沖に到着したのであった。同盟艦隊の出撃を知ったオスマン艦隊も昇る朝日を背にして西進し、互いを視認しあう距離に接近した。波もなく、海は静まり返っていた。

東西の両艦隊は、当時の陸戦と同様に、鳥が翼を広げたような「対面陣形」をとった。西に陣取る同盟艦隊の中央には、総司令官ドン・ファン率いる本隊64隻が位置し、右翼はジャンアンドレア・ドーリア率いる54隻、左翼はアグステイーノ・バルバリーゴ率いる54隻。さらに本隊の後方にはサンタ・クルス率いる後衛30隻が控えていた。これらの各船団は旗の色で区分されており、本隊は「空色艦隊」、右翼は「緑色艦隊」、左翼は「黄色艦隊」、後衛は「白色艦隊」と呼ばれた。この左右対称の陣形の中心は本隊の「空色艦隊」で、そのまた中央にはドン・フ

アンが座乗するキリスト教艦隊旗艦いわゆる「王旗掲揚艦」が位置し、その両脇を固めていたのがセバステアーノ・ヴェニエル指揮のヴェネツィア共和国海軍旗艦とマルカントニオ・コロナ指揮の教皇庁海軍旗艦であった。

いっぽう東に陣取るオスマン艦隊の中央には「大提督」^{カフダン・パシヤ}の総司令官アリ・パシヤ率いるガレー船95隻、右翼はアレクサンドリア総督ムハンマド・シャルク通称「シロッコ」率いる54隻、左翼はアルジェ総督ウルグ・アリ率いる93隻。その後方にも若干の予備艦が配置されていた。オスマン艦隊のほうは左翼に比重を置いていたことがわかる。その左翼を率いたウルグ・アリ（ウルチャリ、ウッチャリ、オッキアリともいう）は、イタリアのカラブリア地方出身のキリスト教徒であったが、少年時代にバルバリア海賊にさらわれ、漕手奴隷として過ごすうちにバルバロッサの跡目を継ぐ大海賊に転身した変わり種であった。

さて勝敗の分岐点は相手の陣形をいかに崩すかであったが、この点で大きく貢献したのは、ヴェネツィアが供出した「浮かぶ砲台」とも呼ばれる6隻のガレアス船であったことはよく知られている。同盟艦隊にはガレアス船が存在したおかげで、大砲の総数においてオスマン艦隊の750門に対して1,800門と圧倒していた。同盟艦隊は本隊と左翼の前に2隻ずつのガレアス船を配備して、敵陣に猛砲撃を加えたのである¹⁷⁾。

この戦争におけるヴェネツィア人の活躍も周知のことである。ヴェネツィア史の大家フレデリック・レーンによれば、同盟艦隊のガレー船総数208隻の内訳は表1の通りである。

ヴェネツィアのガレー船が半数以上を占めていることがわかる。しかも勝利に貢献した左翼の「黄色艦隊」に多く配属されていた。しかし表1には、トスカーナの地名もサント・ステファノ騎士団の名もどこにも記載されていない。ではいったいサント・ステファノ騎士団はどこに配属されていたのか。

表1 レバント海戦における神聖同盟艦隊のガレー船

ヴェネツィア人指揮下のガレー船		
軽ガレー船。乗組員出身地	ヴェネツィア, 自由人	38
	ヴェネツィア, 囚人	16
	クレタ	30
	イオニア諸島	7
	ダルマチア	8
	本土 (テッラフェルマ)	5
大ガレー船。乗組員出身地	ヴェネツィア, 自由人	6
小計		110
他国人指揮下のガレー船		
軽ガレー船。乗組員出身地	ナポリとシチリア	36
	ジェノヴァ	22
	教皇庁と他のイタリア諸国	23
	スペイン, マルタ, その他	17
小計		98
総計		208

出所) Lane, Frederic C., *Venice: A Maritime Republic*, Baltimore, 1981, p. 369.

IV レバントの騎士団

そもそもサント・ステファノ騎士団の参戦が歴史から忘れられた原因は、19世紀の大歴史家ロドヴィコ・アントニオ・ムラトーリが『イタリア年代記』のなかで、「教皇軍司令官マルカントニオ・コロンナ」が「彼のガレー船団」を率いて参加した「教皇庁艦隊」についてしか語らなかったことにある。実際には教皇庁艦隊は先のジェルベの海戦（1559年）で大破されていたため、「教皇庁艦隊」の12隻のガレー船は、コジモー一世が教皇ピウス五世のために肩代わりしたものだった。しかしわれわれは、ムラトーリと違い、フィレンツェ国立文書館に保存された古文書によって海戦全体の経過、とりわけトスカーナ艦隊の行動の一部始終を知ることができる¹⁸⁾。

それらによれば、12隻のうち5隻はサント・ステファノ騎士団に所属し、残る7隻はトスカーナ大公国に所属していたが、いずれにもサン

ト・ステファノ騎士が分乗していた。それぞれの船名と指揮官名は以下の通りである。サント・ステファノ騎士団所属のガレー船は、「カピターナ号」（騎士オラツィオ・オルシーニ指揮）、「グリフォーナ号」（騎士アレッサンドロ・ネグローニ指揮）、「サン・ジョヴァンニ号」（騎士アンジェロ・ビッフォリ指揮）、「サンタ・マリア号」（騎士パンドルフォ・ストロツィ指揮）、「フィオレンツァ号」（騎士トンマーゾ・デイ・メディチ指揮）である。トスカーナ大公国所属のガレー船は、「トスカーナ号」「ピサーナ号」「パーチェ号」「ヴィットリア号」「エルビジーナ号」「パドローナ号」「セレーナ号」である。

この12隻の配置は、前線中央の「空色艦隊」に「カピターナ号」「グリフォーナ号」「トスカーナ号」「ピサーナ号」「パーチェ号」「ヴィットリア号」、右翼の「緑色艦隊」には「サン・ジョヴァンニ号」「サンタ・マリア号」「フィオレンツァ号」、左翼の「黄色艦隊」には「エル

ビジーナ号」,そして後衛の予備艦隊の「白色艦隊」には「パドローナ号」と「セレーナ号」が配されていた。多くは最前線の名譽ある重要な場所を占めていたことがわかる。

なかでもガレー船「カピターナ号」は、「空色艦隊」中央に位置する同盟軍総司令官ドン・ファンが座乗する「王旗掲揚艦」の右隣,すなわち同盟軍副司令官にして教皇庁司令官マルカントニオ・コロナが乗船する「教皇庁海軍旗艦」そのものであった。こうした事情のために「カピターナ号」は教皇に敬意を表して教皇庁の旗を掲げてはいたが,マルカントニオ・コロナ配下の幾人かの兵士を除けば,残りの乗組員は,航海士も兵士も,すべてトスカーナ人で構成されていた。そして何よりもこの「カピターナ号」には騎士団の提督チャーザレ・カヴァニリア自身が乗船し,名目上の指揮権はコロナではあっても,実際上の指揮権はステファノ騎士のオラツィオ・オルシーニに与えられていたのであった。これが,名目的にはコロナが指揮権を握っていることになっていた幻の「教皇庁艦隊」12隻の実体にはほかならない¹⁹⁾。

すでに1571年9月8日にメッシーナ港でおこなわれた総司令官ドン・ファンによる閲艦式においても,100名にのぼるサント・ステファノ騎士たちの整然たる壮麗さは周囲の感嘆と賞賛の的であった。だが見かけ倒しの軍団ではない。騎士たちは,「教皇庁艦隊」の名のもとにはあったが,騎士団の旗を掲げ,騎士団の甲冑をまもって他の誰よりも勇ましく奮戦することになる。

さて,正午頃,ガレアス船の猛砲撃で火蓋を切った戦況は,離れた砲撃戦から接近した白兵戦へと移っていった。同盟軍左翼のバルバリゴ艦隊はオスマン軍右翼のシロッコ艦隊を陸地に追い込むかたちで包囲し優勢をとる。中央の本隊同士は,ガレアス船の猛砲撃を突破したオスマン艦隊が敵陣に突進し,ドン・ファンの旗艦とアリ・パシヤの旗艦が舷々相接して肉弾あいうつ壮絶な白兵戦を展開する。同盟軍右翼のドーリア艦隊とオスマン軍左翼のウルグ・アリ

艦隊は,ともに相手を包囲しようとして南の沖合いに長く延びる。延びたところでウルグ・アリは,右方向に急旋回して同盟軍中央を突こうとするが,後衛のサンタ・クルス艦隊の反撃にあう。

このような戦況にあって,数ある同時代の報告書のなかでも,ガレー船「グリフォーナ号」に「傭兵」の資格で乗り合わせ,セルモネータ公オノラート・カエターニの配下にあった「セレーノ」なる人物の記した「キプロス島戦記」によって,われわれはサント・ステファノ騎士団のガレー船の行動について逐一再現できる。

中央の「空色艦隊」にいた「カピターナ号」と「グリフォーナ号」は,総司令官アリ・パシヤの旗艦とカラ・コジャの軍船に執拗な激しい攻撃を繰り返した。そして敵艦に激突すると,敵艦内部に突入してアリ・パシヤとカラ・コジャ他多数を殺害し,2隻とも捕獲することに成功した。つまり敵将の首級をあげたのはステファノ騎士だったのである²⁰⁾。

右翼の「緑色艦隊」にいた「フィオレンツァ号」の指揮官の騎士トンマーズ・デイ・メデイチは,「緑色艦隊」を率いる優柔不断なジャンアンドレア・ドーリアの指図通りにだらだらと南に延びて拱手傍観するよりは,修羅場と化した激戦地に勇躍して身を投じることを選んだ。しかし「フィオレンツァ号」と「空色艦隊」の中心とはあまりに距離が離れていたために,ウルグ・アリ艦隊に急襲され,たった1隻で百戦錬磨の敵艦4隻に対抗しなければならないはめに陥った。漕手,兵士,船員は切り刻まれたが,それでも騎士たちは必死の防戦に努めた。流された血はおびただしかった。トンマーズ・デイ・メデイチ自身が重傷を負い,騎士の大半は命を落とした。わずかに14人だけが死を免れてウルグ・アリ艦隊の捕虜となった。ところがそのときウルグ・アリも「空色艦隊」の救援隊に襲撃されたため,捕獲していた「フィオレンツァ号」をその場に放棄せざるをえなかった。救援に駆けつけた「グリフォーナ号」が「フィオレンツァ号」を取り戻して曳航した。

右翼の「綠色艦隊」にいた「サン・ジョヴァンニ号」もまた、ウルグ・アリ艦隊との激戦に関わった。指揮官の騎士アンジェロ・ピッフォリは、喉に火縄銃の玉を2つ受けて負傷しながらも、同盟軍のガレー船が救援に現れるまで敵の猛攻に勇敢に立ち向かい続けた。そしてついに3隻のガレー船が「サン・ジョヴァンニ号」を無事救い出したのである²¹⁾。

後衛の「白色艦隊」に配置されていたアルフォンソ・ダッピアーノ艦長の「パドローナ号」は、勇戦して味方のガレー船を敵の歯牙から解放するとともに、大砲の一撃で敵の総司令官アリ・パシヤに最初の傷を負わせたと言われるが、確証はない。また「黄色艦隊」の「エルビジーナ号」は、「ロードスの番兵」(Guardia di Rodi)と呼ばれる敵の巨艦を捕獲し、「空色艦隊」の「トスカーナ号」は、ジェルベの海戦でトルコ軍に奪われていた元教皇庁旗艦のトルコ軍船を奪い返した。夕暮れに戦闘が終了したとき、海は真っ赤な血の色に染まっていたという。

世紀の一大決戦はトスカーナ海軍の輝かしい戦功によって勝利を決したといっても過言ではない。ピサの騎士団教会の天井には、リヴォルノに凱旋帰港する騎士団のガレー船の勇姿が描かれているが、この天井画は大公フェルディナンド一世の委嘱によりヴェローナ人ヤコポ・リゴッツィが1604年に制作したものである。

だが帰国できないまま海の藻屑と消えた多くの騎士がいたことも事実である。しかしこの事実こそ、「一大決戦」における「名誉ある持ち場」を担当した証拠にほかならない。

両陣営の損害を比較すると、同盟艦隊の船舶の損害は被撃沈12隻、被捕獲1隻だったのに対して、オスマン艦隊の船舶の損害は被撃沈113隻、被捕獲117隻である²²⁾。文字通り、神聖同盟軍の圧勝であった。

セッティマンニの報告によれば、オスマン軍からは総司令官アリ・パシヤやシロッコを筆頭に20,000人以上が戦死し、マホメット・ベイら約5,000人が捕虜になったという。キリスト教徒が奪った大砲は334門。解放したキリスト教

徒奴隷は14,000人であった。ちなみにオスマン艦隊の左翼を率いたウルグ・アリは逃げ延びて「大提督」となり、1589年に67歳で世を去るまでさらに数年間地中海を荒し回ることになる。

セッティマンニの報告は次のように続く。「キリスト教徒の側からは、約3,000名が戦死し、同数が負傷し、そのなかには高貴な人々も多く含まれていた。主だった人々、貴族、フィレンツェ人騎士について述べるならば、以下の通りである。ドン・ジョヴァンニ・ダウストリア〔オーストリア公ドン・ファン〕殿、負傷。パオロ・ジョルダナーノ殿、負傷。サンタフィオーレ伯爵、負傷。・・・騎士トンマゾ・デイ・メディチ、負傷。彼はフィオレンツァ号の指揮官として戦い、破れ、上記のごとく負傷して救出された。騎士カルロ・リオニ、戦死。騎士ジャンノッツォ・ダ・マニャーレ、戦死。騎士アントニオ・サルヴィアーティ、戦死。騎士クリストファノ・ボナグイージ、戦死。騎士ジョ〔ヴァンニ〕・マリア・プッチーニ、戦死。騎士フェデリゴ・マルテッリ、戦死。彼らは全員〔サント・ステファノの〕騎士である。騎士アニョロ・ピッフォリは、彼が指揮していたガレー船〔サン・ジョヴァンニ号〕とともに非常に危険にさらされたが、勝鬨が彼を救出するまで勇敢に戦い抜いた。しかし同船上で少なくとも60名の高貴な人々が斃れた。そのなかにはサント・ステファノ騎士シモーネ・トルナブオーニとルイジ・チャッキも含まれていた。〔同船上の〕負傷者は約150名にのぼり、上記の艦長〔ピッフォリ〕は火縄銃を2発喉に浴びて今なお危篤状態である。」²³⁾

1571年10月7日は、キリスト教世界にとっても、サント・ステファノ騎士団にとっても、記念すべき、大変な歴史的一日であった。

だが、ムラトーリを初めとする多くの歴史家は、マルカントニオ・コロナの華々しい名前のもとに、ありもしない「教皇庁艦隊」を称えてきた。ではいったい、なぜサント・ステファノ騎士団は幻の「教皇庁艦隊」の陰に隠れることになったのか。換言すれば、なぜ騎士団は

「教皇庁艦隊」の肩代わりをしなければならなかったのか。その理由を探るには、少し時代を遡ってコジモー一世と歴代教皇の関係を探ってみる必要がある。

V トスカーナ大公位

「公爵」(Duca)のコジモー一世がさらにその上の爵位を熱望するようになったきっかけは、1541年に味わった屈辱に遡るとされている。その年の9月、皇帝カール五世を表敬訪問するためにルッカに赴いたときのこと、フェラーラ公爵エルコレ・デステ二世が皇帝の右側に着席し、コジモー一世は左側に甘んじた。フェラーラ公が宴席でのさまざまなサーヴィスを皇帝に提供する役目を受け持ったのである。また同年12月、ローマにおけるクリスマスの荘厳ミサの際には、ファルネーゼ家出身の教皇パウルス三世(位、1534~49年)が、フェラーラ大使のほうをフィレンツェ大使よりも上座に着席させた。この席順に憤然と抗議したコジモー一世は、なんとしてもフェラーラ公よりも上位に格付けされなければ気がおさまらなると感じたという²⁴⁾。フェラーラ公との強烈なライヴァル意識が生じたのである。またファルネーゼ家の教皇との敵対関係から、コジモー一世は公然とプロテスタントを擁護するまでになっている。

その後のシエナ戦争(1554~55年)で勝利をおさめたコジモー一世は、1557年7月3日に財政難に苦しむスペイン王フェリペ二世からシエナ国家を「封土」として与えられ、「フィレンツェとシエナの公爵」となった。が、それでも満足にはいたらず、「トスカーナ王」の称号を得ようと画策するようになった。

そんなおりの1559年12月24日、シエナ戦争でコジモー一世に仕えていたマリニャーノ侯爵の兄ジョヴァンニ・アンジェロ・デ・メディチがピウス四世(位、1559~65年)を名乗って教皇に登位したことは、コジモー一世と教皇庁の関係を好転させる契機となった。新教皇はコジモー一世が財力で教皇位につけた人物だったのだ。さっ

そく見返りにコジモー一世の次男ジョヴァンニは枢機卿に叙任される。1560年にコジモー一世がローマに表敬訪問に赴いたとき、表向きの目的は「反宗教改革の君主」としてトレント公会議の再開に尽力することであったが、本当の目的は称号問題を論じることであったという。2人の親交からすれば、教皇ピウス四世のもとでコジモー一世が「トスカーナ王」になることは困難ではないと思われた²⁵⁾。カトリック防衛を標榜するサント・ステファノ騎士団の創立(1562年)も、教皇の歓迎を受けないはずがなかった。

ところが称号問題に腐心していた同じ時期に、コジモー一世の私生活では悲劇が起こっていた。1562年の11月から12月にかけて、次男の枢機卿ジョヴァンニ、三男のガルツィア、そして最愛の妻エレオノーラが相次いで病死したのである。コジモー一世の心痛は計り知れなかったが、心痛が重なれば重なるほど、称号獲得への野望はいよいよ偏執的なものに変化していったようである。

コジモー一世が頼みにした切り札は長子のフランチェスコである。皇帝カール五世からスペイン王フェリペ二世への統治権の委譲を模倣して、1564年5月にコジモー一世はフランチェスコに統治権を委譲している。これは引退のためというよりは、むしろ称号獲得に専念するためであった。そしてフランチェスコのために皇帝フェルディナント一世の娘ヨハンナとの婚約をとりつけることに成功した。これはコジモー一世の外交的勝利といわれる。1564年7月に皇帝フェルディナント一世が逝去したために結婚は一時延期となったが、皇帝マクシミリアン二世が即位するにおよんで、現皇帝の妹ヨハンナとの結婚式典は、コジモー一世が称号問題を皇帝に承認させるためには願ってもない好機であって、フィレンツェ史上類例のない王侯的な豪華絢爛さで挙行される運びとなった。花嫁のフィレンツェ入城は1565年12月16日、大聖堂での結婚式は12月18日のことであるが、祝賀の式典は翌年3月まで延々と続いた²⁶⁾。

ところが同時期の1565年12月9日、親友とい

ってよい教皇ピウス四世が崩御した。婚儀と葬儀。栄光と悲惨。晩年のコジモー世には不思議な二律背反がついてまわる。

新教皇ピウス五世（位、1566～72年）は、コジモー世にとって、他のファルネーゼ家の候補者やフェラーラ出身の候補者よりもずっとましではあったが、それでも前任者ほどの親密な間柄ではなかった。前任者時代に決まりかけていた「トスカーナ王」の称号問題を再燃させるためには、新教皇への新たな貢ぎ物が必要であった。こうしてピエトロ・カルネセッキ問題が急浮上するのである。

ピエトロ・カルネセッキ（1508～67年）は、教皇クレメンス七世時代に教皇庁の数々の要職を歴任したフィレンツェ市民であるが、プロテスタント的改革を標榜するワルデス派に傾斜していき、教皇パウルス三世時代の1546年から再三異端審問にかけられ、教皇パウルス四世時代の1558年に「異端者」として有罪が確定した。しかし教皇庁と対立関係にあったコジモー世は「異端者」を保護し続け、教皇庁との関係が好転した教皇ピウス四世時代の1560年には有罪の取り消しに尽力したほどであった。コジモー世はこの「客人」カルネセッキを、新教皇ピウス五世の求めに応じて1566年に教皇庁に引き渡したのである。再び鉄鎖につながれたカルネセッキは、翌1567年10月1日にローマで「異端者」の烙印を押されて斬首されることになる²⁷⁾。

サント・ステファノ騎士団の創設、カルネセッキの身柄引き渡し、さらにはフランス・カトリック陣営への支援などの功績によって、1569年8月に教皇ピウス五世はコジモー世を「カトリック信仰の擁護者」として「トスカーナ大公」の称号を授与する大勅書を発する。「大公」(Granduca) という称号は「公爵」よりは格上であるが「王」よりは格下の称号で、「モスクワ大公」以外にはほとんど前例のない稀少な称号であった。妥協の産物であったが、コジモー世を満足させるには十分であった。カルネセッキの血で大公位を購ったと批判されても冷然と無視しうるほどに、満足であった。

1569年12月10日、教皇の甥にあたる教皇特使ミケーレ・ボネッリがフィレンツェに到着し、12月13日、パラッツォ・ヴェッキオの「五百人広間」において大勅書が読み上げられた。コジモー世やフランチェスコはもちろん、各国大使、元老院議員、サント・ステファノ騎士、その他の行政官、貴族、市民が多数列席する厳粛な式典であった²⁸⁾。

翌1570年2月15日から3月13日までコジモー世はローマに滞在した。その間の3月5日、教皇ピウス五世による大公の戴冠式が盛大に挙行された。これはコジモー世の一世一代の晴れ舞台であった。コジモー世は大公冠をわざわざフィレンツェから持参するほどの熱の入れようだったが、皇帝マクシミリアン二世、スペイン王フェリペ二世をはじめ、イタリア諸国の君主は、こぞって大公位授与に猛反対した。「トスカーナ大公」の権威の裏付けは、ただ一人教皇によるものだったのである²⁹⁾。

1571年5月に「神聖同盟」が結成されたときの大公コジモー世と教皇ピウス五世との関係は以上のようなものであった。同年8月、大公と教皇は契約を結んだ³⁰⁾。大公は教皇の求めに応じてガレー船を供出ししないわけにはいかない。「教皇庁艦隊」の名の陰に甘んじないわけにはいかない。これが、サント・ステファノ騎士団がレバント海戦に参戦し、しかも参戦したことが歴史のなかで忘却されるようなかたちで参戦しなければならなかった理由である。

おわりに

コジモー世を団長に戴くサント・ステファノ騎士団は、創立後わずか9年でレバントの勝利に貢献した。戦場から生還した者は、とくに名誉の戦傷を負って生還した者は、歴史的瞬間に居合わせたという異常な経験に興奮し、自己と自軍の戦功を幾分過大に評価し、吹聴したことであろう。ちょうどスペイン船「マルケーサ号」に乗り込んで左腕を負傷したスペイン人ミゲル・デ・セルバンテスが、後年『ドン・キホー

テ』を書いたことよりも、「古今未曾有の大戦闘」で戦ったことをより大きな誇りとしたように。³¹⁾

だから騎士団の戦功についても、トスカーナ人の記録よりは幾分割り引かねばならないかもしれない。それでも、ローマでの凱旋式典でローマ教皇ピウス五世がトスカーナ海軍の戦功を讃えたこと、総司令官ドン・ファンにさえ十分な名誉を与えなかったフェリペ二世がゴジモー世に対しては十二分の敬意を表さないわけにはいかなかったこと、そしてトスカーナ海軍の戦闘能力の高さを身をもって経験した教皇庁海軍司令官マルカントニオ・コロナが、今後起こりうる海戦にサント・ステファノ騎士団の存在ぬきには考えられなくなっていたことは、事実のようである。

レバント海戦で東西の勢力地図が塗り替えられたということはないが、少なくともオスマン艦隊の不敗神話が崩れたことだけは事実である。だが、やがてオスマン艦隊は再建され、ヴェネツィアは単独講和を結んで同盟軍を裏切ることになるだろう。レバントの圧勝にもかかわらず、地中海の水平線の彼方には再び暗雲がたれこめ始めていた。戦勝に酔ってなどいられない。10月7日の試練を経て一回りも二回りも成長したサント・ステファノ騎士団の存在が、また必要とされる日が遠からずやってくるだろう。

注

- 1) 『戦略戦術兵器事典3〔ヨーロッパ近代編〕』学習研究社, 1995年, 188-189ページ。
- 2) サント・ステファノ騎士団の会則と組織, および船舶の種類については, 拙稿「サント・ステファノ騎士団の創立」『阪南論集 人文・自然科学編』第34巻第4号, 1999年3月, 拙稿「サント・ステファノ騎士団の船舶」『阪南論集 人文・自然科学編』第35巻第1号, 1999年6月, を参照。
- 3) 三橋富治雄『スレイマン大帝—オスマン帝国の栄光』清水書院, 1970年, 77-86ページ。スタンリー・レーン・プール, 前掲信次訳『バルバリア海賊盛衰記—イスラム対ヨーロッパ大海戦史』リポート, 1981年, 102-107ページ。鈴木薫『オスマン帝国—イスラム世界の「柔らかな専制」』講談社現代新書, 1997年, 162-163ページ。
- 4) Ciano, Cesare, *Santo Stefano per Mare e per Terra*, Pisa, 1985, p. 13.
- 5) オラン攻囲戦については, フェルナン・ブローデル, 浜名優美訳『地中海』第4分冊, 173-177ページ。ドラグトについては, レーン・プール, 前掲書, 143ページ以下に詳しい。
- 6) Guarnieri, Gino, *I Cavalieri di Santo Stefano nella storia della Marina Italiana (1562-1859)*, Pisa, p. 94 e Appendice n. 2 (A. S. F., *Settimanni*, vol. III, c. 272r) .
- 7) *Ibid.*, p. 94 (A. S. F., *Settimanni*, vol. III, c. 273 v) .
- 8) *Ibid.*, p. 95.
- 9) Ciano, *op. cit.*, p. 15.
- 10) ブローデル, 前掲第4分冊, 207ページ以下。レーン・プール, 前掲書, 143ページ以下。
- 11) Guarnieri, *op. cit.*, p. 97.
- 12) *Ibid.*, p. 97.
- 13) Galluzzi, Riguccio, *Istoria del Granducato di Toscana sotto il Governo di Casa Medici*, Milano, 1974, vol. 2, p. 63.
- 14) Guarnieri, *op. cit.*, p.98.
- 15) *Ibid.*, pp.99-100.
- 16) 前掲『戦略戦術兵器事典3』28ページ。
- 17) 同上書, 188-189ページ。
- 18) Guarnieri, *op. cit.*, Appendice n. 3, n. 4, n. 5を参照。
- 19) *Ibid.*, pp. 101-102.
- 20) *Ibid.*, p. 102.
- 21) *Ibid.*, p. 102.
- 22) 前掲『戦略戦術兵器事典3』188ページ。損害の実数は史料によってさまざまであるが, ブローデル, 前掲第4分冊, 373ページも参照のこと。
- 23) Guarnieri, *op. cit.*, p. 104 e Appendice n. 5 (A. S. F., *Settimanni*, vol. III, c. 547 r-550 v) .
- 24) Maffei, Venocchio, *Dal titolo di Duca di Firenze e Siena a Granduca di Toscana*, Firenze, 1905, pp. 7-8.
- 25) *Ibid.*, pp. 15-23.

- 26) *Ibid.*, pp. 31-38. およびこの間の称号問題については, Galluzzi, *op. cit.*, vol. 2, pp. 48-69. 結婚式典の詳細については, Bertela, G. G., Tofani, A. P., *Feste e apparati medicei da Cosimo I a Cosimo II*, Firenze, 1969, pp. 15-20 ; Conti, P. G., *L'Apparato di nozze di Francesco de' Medici e di Giovanna d'Austria*, Firenze, 1936.
- 27) ピエトロ・カルネセッキ事件については, Maffei, *op. cit.*, pp. 60-63 ; Galluzzi, *op. cit.*, vol. 2, cap. IV, cap. V. ; Cantagalli, Roberto, *Cosimo I de' Medici : Granduca di Toscana*, Milano, 1985, pp. 271-278 ; Bertolotti, Antonio, *Martiri del libero pensiero e vittime della Santa Inquisizione nei secoli XI, XII, XIII*, Roma, 1891, pp. 38-43.
- 28) Maffei, *op. cit.*, pp. 72-74.
- 29) Cantagalli, *op. cit.*, pp. 288-291.
- 30) Ciano, *op. cit.*, p. 18.
- 31) クリストファー・ヒバート, 横山徳爾訳『ヴェネツィア (上)』原書房, 1997年, 153ページ。

(1999年7月21日受理)